

# 「つながり」と「交流」

## 幼小連携をめぐる幼稚園と小学校の意識の違いから

藤江 康彦

幼児教育の課題の一つに、就学前教育と小学校との連携（以下、幼小連携）の推進がある。学校段階間の移行に伴う適応への困難を減じ、子どもの発達  
の連続性に応じた幼小中高の教育課程の一貫性を保証する取り組みの一環である。子ども間の交流、教師間の情報交換や合同の研修、相互の授業参観や保

育参観、一貫した教育課程の検討などが試みられている。これらは大きく「幼小間の教育課程上の接続」、「交流」とくることができらるだろう。いずれにおいても、幼小間の相互理解が重要な課題となっている。本稿では、幼小連携推進校園を対象とした全国調査（二〇〇三年十二月実施）のうち、幼小連

携の成果と課題に関する回答を参照しつつ、幼小連携の課題と相互理解に向けた方途を探る。

調査において、「幼小間の教育課程のつながりへの配慮」、「異年齢交流活動」に関する項目では幼小の意識の違いがみられた。まず、幼小間での教育課程のつながりへの配慮についてみてみよう。「一年生までを見通して年長児の保育の方針を立てた」ことを成果としてあげた幼稚園が六十九・四パーセント、「幼稚園での保育のあり方をふまえて新入学年の指導方針を立てた」ことを成果としてあげた小学校が五十二・四パーセントであった。これは、幼稚園が「送り出す側」であり小学校が「受け入れる側」であるという立場の違いによるとも考えられる。しかし、幼稚園から小学校に移行した子どもは感じる「段差」の根はむしろここにある。子どもは（おともも）、それまでの知識や経験を基盤とし活用しつつ、新たな活動のなかでその知識や経験を広

げていく。しかし、小学校に入学し、そこで求められる知識や経験がこれまでとは全く違うものであるように感じられるとき、子どもはそこに「段差」を感じるのである。もちろん、少々の段差であれば子どもは自分なりにそれを乗り越え、適応していく。それが成長への自信ともなる。しかし、例えば、幼稚園では年長児として年下の子どものお世話などそれなりの責任を任されていた子どもたちが小学校に入ったとたん最下級生となってしまう、あらゆる面において「知らない」、「できない」存在とみなされる「お世話される」立場となる。このように、これまでの経験や行動様式が全く通じない環境への移行が、子どもにとってはストレスの原因にもなるし、そもそもこれでは段差を越えたことにはならない。子どもの経験の連続性という点から考えれば、小学校側でもこれまでの子どもの生活経験、学習経験に目を向けるべきであろう。そのうえで、子どもが安

心して越えることができ  
るような、越えたことで  
自己効力感を高めること  
ができるような適切な段  
差を、幼小の教師の協働  
の下でデザインしていく  
ことが求められるだろ  
う。



次に、異年齢交流への期待という点である。「異年齢の子どもの姿を見ることで、子ども自身が自己の成長の実感をもった」ことを成果としてあげた小学校が八十二・五パーセント、「異年齢の子どもの姿を見ることで、子ども自身が自己の成長への見通しをもった」ことを成果としてあげた幼稚園が六十七・八パーセントであった。小学校の場合は、「異年齢交流」が幼小連携の一つの柱として位置づけられているという現状がある。とりわけ、身近な人々

との交流が生活科の活動として教育課程に位置づけられている。小学校の子どもたちは自分よりも年下の子どもたちと関わりながら他者へのケアの仕方、相手にわかりやすいコミュニケーションのとりかたなどを試行錯誤しつつ学んでいくことができる。加えて、年下の子とも接することで自分のこれまでの経験をふり返り、「以前よりも大きくなった」と「できなかつたことができるようになった」ことを実感し自尊心をもつことができたり、同年齢や年長の子どもの関わりではみえない自分の新たな面に気づくことができるだろう。他方、幼稚園の子どもたちにとっては、小学生との交流活動において自分の成長への見通しをもつことはそれほど促されないかもしれない。しかし、小学生との交流の意味はみえづらいかもしれない。しかし、小学生との交流活動では、以下のようなことが可能であろう。すなわち、小学校では四十五分という時間が活動の単

位であることを知り、その長さを体験したり、小学校の教師の指導の仕方に気づくことが可能であろう。また、年齢に近い一年生との交流であれば、自分も小学生と五角に活動できるという就学への自信がもてるかもしれない。あるいは交流の相手が自分の進学先であれば教師や上級生と「顔見知り」の関係が築かれるかもしれない。その点で、幼稚園にとつての交流の意味は小学校との間の段差を適切なものに調整するという点にあるといってもよいだろう。

最後に、調査では、「小学校教諭と幼稚園教諭の間で指導観の共通理解を図ること」について、六・十・五パーセントの幼稚園と三十八・九パーセントの小学校が課題であるとしている。見方を変えれば、幼稚園側に共通理解が不十分であるという意識が強い。実態としてそうなのか意識の問題であるのかは明らかではない。しかし、背景には幼稚園は先

を見通した保育をこころがけているが小学校では就学前の子どもの学習や経験の履歴が十分にふまえられていないという認識があるのではないだろうか。

他方で、小学校では交流の意義が強く認められ力点が置かれている。こう考えることはできないだろうか。すなわち、幼小連携における子ども同士の交流は教師が相互理解を深めるための契機である。同一の活動をめぐって議論し、省察するなかで、幼小の教師がそれぞれに子どもの育ちをイメージしたり、子どもの学びの芽をみいだすことが可能になるだろう。また、幼小相互の教師が子どもへどのように関わっているか、どのような教材を用いているかを知ることを通して接続期のカリキュラム編成への手がかりを得ることもあるかもしれない。そのように考えると、保育者、教師双方の資質向上をもたらず広い意味での研修の機会ともなりうるだろう。

(お茶の水女子大学)